

## マルコによる福音書 12 章 28 節～37 節

2018 年 2 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 489 番 「心を尽くして 思いを尽くして」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 87 ページ）

4、テキストの位置

まだ火曜日の続きです。しかし前回までとは、明らかに違うところがあります。

イエス様がエルサレムに来てから、祭司長、律法学者、長老たち、ファリサイ派、ヘロデ派、サドカイ派といった人たちが議論を吹き掛けてきました。

イエス様とその敵対者たち

の言葉を退け、なおも神殿の境内にいたとき、一人の律法学者がイエス様に近づいて来ました。イエス様の逮捕まで、イエス様に敵対する人はこれ以降出てきません。ではここで律法学者はどのような問いかけをしたのでしょうか。

この物語は、マタイ 22 : 34～40 とルカ 10 : 25～28 にも載っています。ところがマルコ福音書だけ、際立った特徴があります。それはマタイとルカに登場する律法の専門家がイエス様を「試そうとして」尋ねたのに対し、マルコに出てくる律法学者はそのような思いを持っていないということです。

これは何を意味するのでしょうか。詳しく見ていきたいと思えます。

エルサレムにて	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	取り上げられる実り
		12:13-17	神のものは神へ
		12:18-27	生きている者の神
		12:28-34	たいせつなのは愛
		12:35-37	キリストとは
		12:38-40	律法学者批判
12:41-44	たくさん入れた人		

## 5、節ごとに

### ◆たいせつなのは愛

12:28 (そして) 彼ら~~の~~(が) 議論(しているの) を聞いていた一人の律法学者が進み出(て)、イエス(彼) が(彼らに) 立派に(うまく) お答えになったのを見て、(彼に) 尋ねた。「あらゆる(すべての) 掟のうちで、どれが第一(のもの) でしょうか。」

イエス様の前に、一人の律法学者が現れました。彼は敵対者に対するイエス様の答えが素晴らしいことに気づいたのでしょう。イエス様だったら自分が抱えている疑問に答えてくれると思ったのかもしれませんが。

これまでイエス様に議論を持ち掛ける人たちは、「先生」とイエス様を持ち上げてみたり、白々しいお世辞を言ってみたり、また明らかに陥れようとしてきました。しかし彼は、本心からイエス様に問いを投げかけました。

彼は掟の中で、第一のものはどれかと尋ねます。彼らが遵守していた掟は、613 あったと言われます。しかしすべてを同等に守ることは大変だと考え、大きい戒めと小さな戒めを区別することは、よくあったようです。

ちなみに、大きい掟とは命や多額の金銭にかかわるもので、小さい掟とはそのようなものに大きな影響を及ぼすことがないものだそうです。ユダヤ教のラビたちの間でも、そのような区別をしていました。

12:29 イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『(聞け、) イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。』

イエス様は「聞け、イスラエルよ」から始まる言葉を引用します。これはユダヤ教の中でも最も重要な言葉の一つです。シエマ(ヘブライ語で「聞け」) と呼ばれるこの祈りは、神は唯一であるという信仰告白です。

男性の成人に達した敬虔なユダヤ人は、この祈りを日に三度唱えていたそうです。ユダヤ教にとってこの祈りは、キリスト教にとっての主の祈りと同じような特別なものであったようです。

イエス様がこの祈りを引用したということは、イエス様の立場はユダヤ教の枠内にあることを示します。この福音書が書かれたころ、キリスト教はユダヤ教から「多神教」と非難されていました。しかしこのイエス様の言葉が示すように、キリスト教も唯一の神を信じる一神教なのです。

12:30 (そこであなたは、あなたの)心を尽くし、(あなたの)精神(生命)を尽くし、(あなたの)思いを尽くし、(あなたの)力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

申命記 6 章 4～5 節にこのようにあります。

聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

少し言葉が違うところがありますが、29～30 節のイエス様の言葉は、この申命記からとられています。多くのユダヤ人は日に三度シエマを唱えると言いましたが、こんなに短い祈りではありません。申命記 6 章 4～9 節、11 章 13～21 節、民数記 15 章 37～41 節をすべて唱えていたそうです。

ちなみにわたしたちが日に三度？唱えている主の祈りは、日本語で 168 文字です。シエマは 3 箇所合わせて 952 文字もあります。漢字は一文字として数え、句読点も文字数に入れているので正確ではありませんが、ユダヤの人たちは単純に、主の祈りの約 5.7 倍も長い祈りを覚え、唱えていたことになります。

イエス様が言った一つ目のたいせつな掟、それは「神さまを愛する」ということです。少し違った角度でいうと、「神さまの喜ぶことをする」ということかもしれません。でもそれは、具体的にどうすることなのでしょう。

12:31 第二の掟は、これである。『(あなたは、あなたの)隣人を自分(あなた自身)のように愛しなさい。』この二つにまさる(より大きな)掟はほかにない。』

イエス様は続いて第二の戒めを伝えます。律法学者は、第一は何ですかとしか聞いていないのに、イエス様は第二まで語り出します。それは第一と第二の戒めが、密接に関係しているからです。神さまを愛することと隣人を愛することは、同じことだと言うのです。

人は神さまを愛するという第一の戒めを、隣人を愛するという生き方をするにおいてしか、守ることができません。神さまだけ愛して隣人は知らない、などということはありません。隣にいる人を愛することにおいてのみ、神さまへの愛は具体化されるのです。

12:32 (そして)律法学者はイエス(彼)に言った。「先生、おっしゃるとおり(確かにそう)です。『神は唯一である(り)。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当(真実のこと)です。」

32～34 節は、マルコ福音書にしか見られません。また律法学者がイエス様の発言を肯定する言葉も、マタイ、ルカ福音書には出てきません。

福音書が書かれた時代にも、律法学者の属するユダヤ教とキリスト教の間で論争が続いていました。またイエス様が十字架につけられたのはユダヤ教の指導者のせいだと、キリスト教徒は考えていたようです。

だとしたら、律法学者の中にも理解者がいたというこの記事は、あまり好ましくないはず。だからマタイやルカ福音書では、この律法学者との会話も「論争物語」に変えたのではないか、と考えるのが自然だとされます。実際にはイエス様の言葉に変えられた人が、律法学者の中にもいたということです。

**12:33** そして、『心を尽くし、知恵（理性）を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。』

神さまや隣の人を愛する愛が、焼き尽くすささげ物やいけにえといった神殿祭儀よりもすぐれているという指摘は、旧約聖書に何か所もあります。

サムエルは言った。「主が喜ばれるのは 焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。」（サムエル上 15 : 22）

わたしが喜ぶのは 愛であっていけにえではなく 神を知ることであって 焼き尽くす献げ物ではない。（ホセア 6 : 6）

お前たちのささげる多くのいけにえが わたしにとって何になるろうか、と主は言われる。（イザヤ 1 : 11）

外面的な宗教的遵守が、神さまの喜ばれることではありません。人を愛し、神さまを愛することこそ、神さまの望んでいることなのです。この律法学者はイエス様の言葉を反復しながら、そのことに気がつかしました。

**12:34** （そして）イエスは律法学者が適切な（賢く）答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と（彼に）言われた。もはや、（誰も）あえて（彼に）質問する者はなかった。

イエス様は律法学者を神の国に招きます。一方、敵対者は質問するのをやめます。もう言葉では太刀打ちできないからです。では何によって対抗しようとするのでしょうか。

## ◆キリストとは

12:35 (そして) イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシア (キリスト) はダビデの子だ』と言うのか。

イエス様はさらに神殿で教えます。周りには弟子たちや群衆だけではなく、口をつぐんでしまった敵対者も様子をうかがうためにその場にいたことでしょう。ここでイエス様は、律法学者の教えに疑問を投げかけます。

律法学者は、キリストはダビデの子だと教えていたようです。ちなみにイエス・キリストのキリストというのは称号です。ヘブライ語でメシア (油注がれた者) という意味ですが、原文では「クリストス」となっていますので、ここでは「キリスト」と訳します。

ダビデはイスラエル王国の中でも、最も偉大な王として尊敬されてきました。そのため来たるべき救い主もダビデの子孫であるはずだと考えられていました。キリスト教にもその影響が見られ、マタイ福音書 1 章のイエス様の系図にもダビデは登場します。しかしイエス様は、「キリストはダビデの子ではありえない」と言われます。

12:36 ダビデ自身が聖霊を受けて (によって) 言っている。『主は、わたしの主にお告げになった (言った)。「わたしの右の座に着き (に座し) なさい。わたしがあなたの敵 (たち) を あなたの足もとに屈服させる (置く) ときまで」と。』

この言葉は、詩編に見られます。

わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」(詩 110 : 1)

この詩編はダビデの作だと信じられていました。ここに出てくる「主」は神さまのことで、「わたしの主」はキリストのことです。つまりここでは、神さまがキリストに対して、あなた (キリスト) に敵対する勢力をわたし (神さま) が倒すから、それまでわたし (神さま) の右に座していなさいと言っているのです。ダビデが詩の中で、キリストを「わたしの主」と呼んでいることがポイントなのです。

12:37 このようにダビデ自身がメシア (彼) を主と呼んでいるのに、どうしてメシア (彼) がダビデの子なのか。」(そして) 大勢の群衆は、イエス (彼) の教えに喜んで耳を傾けた。

ここでダビデが「主」と呼ぶキリストは、ダビデの子よりも位が高いはずです。

このとき群衆は、彼が律法学者の教えの間違いを指摘する姿を見て、喜んでいました。しかしその喜びは、やがて怒りとなり、「十字架につけろ」という叫びに変わっていきます。皮肉なことですがその理由の一つに、「イエス様がダビデの子ではなかった」ということが挙げられます。

イエス様は受難を選び、栄光や支配とは逆の道を進まれました。人々は、民族を解放し、政治的な強さを持った新しいイスラエルの王となる「ダビデの子」を求めているのです。わたしたちはどのような「キリスト」を待っているのでしょうか。

### <今日の箇所から>

マルコによる福音書には、マタイ福音書の山上の説教やルカ福音書の良きサマリア人、放蕩息子のたとえなど、人々に具体的な義務を記した教えがあまりありません。どのようなおこないをすればよいのかというリストも、明記されていません。

イエス様はわたしたちに、あれをしろ、これをしろと細かく命令されず、ただ神さまを愛し、隣人を愛しなさいとだけ言われています。

聖書のいう「愛」とは、見返りを求めず、一方的に注がれるものです。コップに水があふれるほど注がれる。そしてあふれ出してもさらに水が注がれている。そのようなものが、神さまの愛です。そのあふれた水を、隣の人に注ぎかける。それが隣人愛なのです。したがって神さまと人を愛する前提として、神さまからの愛が必要です。その神さまからの愛を感じることが、大切なのです。

さて、ここに出てくる律法学者は、愛はどんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れていると言いました。焼き尽くす献げ物やいけにえとは、今でいうと何に当たるのでしょうか。考えてみましょう。礼拝さえしておけば大丈夫。果たしてそうなのかという疑問も残ります。

聖公会の礼拝（聖餐式）の最後は「派遣」で終わります。派遣とは、礼拝堂を出て、今、必要とされている人のところに行くことです。愛を求めている人に、愛を届けに行くことです。そのことを意識しながら、歩んでいけたらと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は3月22日(木)14時からです。「律法学者批判、たくさん入れた人」(マルコ12:38~44)について学んでいきます。